春の部

1 春暁

春暁　　孟　浩然

春眠不覺曉　春眠　暁を覚えず
處處聞啼鳥　処処　啼鳥を聞く
夜來風雨聲　夜来　風雨の声
花落知多少　花落つること知んぬ多少ぞ

【通釈】

起句　春の睡りの心地よさに、夜が明けたのも気付かないでなおうとうと、
承句　窓の外は、あちらこちら小鳥のさえずり。
転句　そういえば、ゆうべは激しい吹き降りだったが、
結句　庭の花々もだいぶ散ってしまったことだろうなあ。

【語釈】

春眠…春の心地よい眠り。　不覚暁…夜の明けたことに気がつかない。
處處…あちらでもこちらでも。　啼鳥…鳥の啼き声。　夜來…昨夜。
知多少…どれほどか、さぞたくさん……だろう。
「多少」には①多い、②多いと少いと。③多いか少ないか、いかほど。などの意味がある。③は疑問詞的用法となる。「知」は疑問詞の上に付くと不知(知らず)の意になる。

【押韻】

上声篠韻。　曉、鳥、少、　五言絶句は普通起句には押韻しないが、起句にも押韻してもよい。

【解説】

春の目覚めの心地よさの中で、ゆく春を惜しむ平和で充ち足りた生活の情景を、美事に唱いあげた詩です。
孟　浩然(六八九―九一〇)は、王維・王昌齢・李白・杜甫　等と共に盛唐を代表する詩人の一人で、襄陽(今の湖北省)の豪族の生れ。節義の士で若くして各地を放浪、四十歳の時都長安に上り、科挙の試験に挑み失敗、その後はあまり官に就かず故郷に帰り隠棲、詩人達と交り乍ら地方の生活を楽しみます。
この詩はその自由な生活を、都で官に就きあくせくする人達に誇示しているようにさえ感じられます。
またこの詩は、古来日本人の最も愛した詩の一つで、今なお我々の心を捉えて放しません。
孟　浩然の代表作をもう一詩左に示します。

付一　宿建德江　　建德江に宿す　　孟浩然

移舟泊煙渚　　舟を移して煙渚に泊す
日暮客愁新　　日暮　客愁　新なり
野曠天低樹　　野曠くして天　樹に低れ
江清月近人　　江清くして月　人に近し

2　夜坐　　夜坐　　鄭有極

江梅欺雪樹槎牙　　江梅　雪を欺いて樹　槎牙たり
梅片飄零雪片斜　　梅片　飄零して雪片　斜めなり
夜半和風到窓紙　　夜半　風に和して窓紙に到る
不知是雪是梅花　　知らず是れ雪　是れ梅花

【通釈】

起句　野生のごつごつした梅の樹の枝いっぱいに咲いた花は、まるで雪かとまがうばかりで、

承句　梅花がひらひらと舞い落ちるさまは、雪が斜めに降っているよう。

（梅花がひらひらと舞い落ち雪が斜めに降っている。）

転句　夜半になって風とともに明かり窓の紙障子に吹き付けているのは、

結句　雪だろうか、あの梅花だろうか。

【語釈】

夜坐…夜中寝ずにじっと坐っていること。　江梅…野生の梅花。　野梅。

槎牙…木の枝が角ばってごつごつしているさま。　飄零…ひらひらと舞い落ちる。

【押韻】

平声麻韻。　牙、斜、花、

【解説】

鄭　有極は南宋の人。名は鄭会。有極は字。號は亦山。嘉定四年（一二一一）の進士。朱熹に学んだという。

この詩は、厳しい寒さの中に清らかに咲く野梅を詠じたもの。起句、承句、結句にそれぞれ梅・雪の二字を重ねて用いながら重複を感じさせず、かえって余分な語を省き梅花の清純さと鮮やかな季節感を強調することに成功している。作者の詩力と精神の清らかさをも感じさせる美しい小品です。

3 雑詩

雑詩　　王維

君自故郷來　　君故郷より来る
應知故郷事　　応に故郷の事を知るべし
來日綺窗前　　来る日　綺窓の前
寒梅著花未　　寒梅　花を著けしや未だしや

【通釈】

起句　あなたは故郷からおいでになった、
承句　きっと故郷の消息をご存知でしょう。
転句　あなたが出発された日、我が家の飾り窓の前の、
結句　寒梅はもう花を著けていたでしょうか。

【語釈】

雑詩…特定の題のもとに作られたものでない詩を意味する。
應…まさに……すべしと読む。推量を表す。
綺窗…あや絹などを張った美しい飾りのある窓。女性の部屋の窓。窗は窓の正字。
未…句末に用いて疑問を表す。

【押韻】

去声寘韻。事、去声未韻。未、通韻

【解説】

王　維（六九九―七六一）は盛唐を代表する大詩人の一人。字は摩詰。一歳年下の弟王縉と共に俊才のほまれ高く、二十一歳で進士及第。詩風は典雅、静謐と評されている。詩の他に書、画にも秀でまた琵琶の名手でもあった。また家族思いで兄弟仲が好く熱心な仏教信者で、三十歳の頃妻を亡くした後一生再婚しなかったという。

官位は昇進と挫折を経験、特に安禄山の乱では一時賊軍に捕えられ大きな挫折を味わった。四十歳を過ぎた頃、長安の南東の渓谷輞川の地に広大な別荘地を手に入れ輞川荘と名付け、官僚生活の合間をそこで過ごすという半官半隠の生活を楽しんだ。

この詩は雑詩と題する三連作の第二首で、旅先にある夫の望郷の思いを詠じたもの。故郷に残している最愛の妻を直接云わず、妻の部屋の窓（綺窗）の梅にことよせてその消息を質すという趣向。美しく心暖まる作品です。ちなみに連作の第三首は寒梅が開いたという空閨を守る女性の想いを詠じたものとなっています。

4 春雪　　春雪　　東方　虬

春雪滿空來　　春雪　空に満ちて来たり
觸處似花開　　触るる処　花の開くに似たり
不知園裏樹　　知らず園裏の樹
若箇是眞梅　　若箇か是れ真の梅ぞ

【通釈】

起句　春の雪が空いっぱいに降ってきて、
承句　雪が付着して、到る処花が咲いているようだ。
転句　いったい、庭の木々のうち、
結句　どれが本当の梅なのだろう。

【語釈】出

春雪…春に降る雪。　空…①むなしい。何もない。②そら。天空。天空には何もないからいう。
園裏樹…庭園の木。裏は中。　若箇…いずれ。どれ。

【押韻】

平声灰韻。　來、開、梅、

【解説】

東方　虬?―?)は初唐の人。則天武后に仕え次のような逸話がある。武后が洛陽の南の龍門に遊んだ時、扈従の群臣に詩を作れと命じたところ、東方　虬が最初に作ったので褒美として錦の袍を賜った。ところが次いで宋之問の詩が出来ると、そのできばえの素晴らしさを賞し、武后は東方虬から袍をとりあげて宋之問に賜ったと。二人が当時を代表する詩人であったことがうかがえる。
この詩は春の思いがけない降雪に装う梅樹の庭の風情を美しく詠じた佳作です。

5 探春　　探春　　戴　益

盡日尋春不見春　　尽日　春を尋ねて春を見ず
芒鞵踏遍隴頭雲　　芒鞵　踏み遍し隴頭の雲
歸來適過梅花下　　帰来　適　梅花の下を過ぎれば
春在枝頭已十分　　春は枝頭に在って已に十分

【通釈】

起句　一日じゆう春の風景をもとめて尋ね歩いたが、どこにも見付けることが出来なかつた。

承句　わらじがけで梅林に分け入り歩きまわつたのだったが……。

転句　さて疲れはてて帰る道すがら、たまたま梅の木の下を通過したのでふと見上げると、

結句　こずえの蕾はすっかりふくらんで、已に春のけはいは十分ではないか。

【語釈】

探春…春の景色を尋ね歩くこと。　盡日…一日じゆう。

芒鞵…わらじ。鞋。　踏遍…すみずみまで歩きまわる。

隴頭雲…隴頭は隴山のほとり。隴山は山の名(①河南省信陽縣②陝西省浪隴縣)三国時代呉の陸凱が江南の太守であつた時、隴頭に在つた親友の范曄に対し梅花と詩一首を添えた書信を寄せた故事により、隴頭雲は梅花をいう。

歸來…帰り道に。来は助辞で意味はない。

【押韻】

平声眞韻。春、平声文韻。雲、分、の通韻。

【解説】

戴　益(?…―?)は宋代の人。この詩は単なる探春の詩としてではなく、「真理にを探求しようとしていろと高遠なことを学び迷った末に、結局すぐ手近なところにあることに気付い」た」。「道は近きに在り」との寓意が説かれ、禅の教えを説く詩として伝えられて来たようです。

詩の構成は、「春」を起句に重複して用いいたのち、更に結句にも用いて強張しているほか「頭」の重複もありいささか破格の感はあるが、読む人に応じて如何ようにも鑑賞出来る格調高い逸品といえます。

6 梅花

梅花　　王安石

牆角數枝梅　牆角　数枝の梅

凌寒獨自開　寒を凌いで独自に開く

遙知不是雪　遥かに知る是　雪ならざるを

爲有暗香來　暗香の来る有るが為なり

【通釈】

起句　かきねの隅の梅の数本の枝が、

承句　寒さにもめげず、ただひとりだけ花を咲かせている。

転句　遠くから見ても、これは雪ではないことが分かる。

結句　それは、どこからともなくよい香りが漂って来るからだ。

【語釈】

牆…かきね。土塀。　凌寒…寒さをしのぐ。寒さをものともせず。

獨自…ひとりだけ。

暗香…どこからともなく漂ってくる香り。

【押韻】

平声灰韻。梅、開、來、

【解説】

王 安石(一〇二一―一〇八六)は北宋の大政治家であり文章家且つ詩人。臨川(江西省)の人。二十二歳の若さで進士及第。長く地方勤務し、政治の腐敗と国力の衰退を歎き政治改革を提唱。

五十歳の時神宗皇帝の信任を得て宰相となり、その後六年間いわゆる新法改革を断行し、その後南京郊外の鐘山に隠居した。しかし多くの政敵を作り、神宗皇帝の死後は新法党と旧法党の果てしない政争を生じ、終に国力は回復せず、北宋は金の侵略により滅亡した。

この詩は、困難な政治情勢のもと断乎改革を推進せんとする自らの心境を梅花に託したもので、政治家王安石の面目躍如たる作品といえそうです。

7 雪梅　雪梅　方岳

有梅無雪不精神　梅有りて雪無ければ精神ならず

有雪無詩俗了人　雪有りて詩無ければ人を俗了す

薄暮詩成天又雪　薄暮　詩成って天又雪ふる

與梅併作十分春　梅と併せ作す十分の春

【通釈】

起句　梅が咲いても雪が降らなければ、生気ある美しい風景とはならない。

承句　梅と雪がそろっても、詩心が起らぬようでは俗物だ。

転句　夕暮れに詩が出来上がり、ちょうど天から雪も降って来た。

結句　梅と詩と雪と三者がそろって、これで完全に春を満喫出来るというものだ。

【語釈】

精神…①心。たましい。②気力。元気。③生気。光彩があって美しい。

俗了…俗化してしまう。無学、無風流なものとしてしまう。

十分春…完全な春。

【押韻】

平声眞韻。神、人、春、

【解説】

方 岳(一一九九―一二六二)は南宋の人。一二三二年進士及第。才気鋭く詩文にすぐれ、名言佳句が湧き出るさまは天性のものであつたという。

この詩は宋代の詩の特徴を持つてやや理屈っぽさはあるものの、起句に梅と雪、承句に雪と詩、転句に詩と雪、結句に梅を置いてこれらを美しく重複配置し、又精神とか俗了と言うやや詩的でない語を併用して嫌味のない詩に仕上げている手法は美事という他はない。宋代梅を詠じた特色ある佳作の一つです。

8.落梅　　落梅　　陸　游

醉折殘梅一兩枝　　酔うて折る　残梅の一両枝

不妨桃李自逢時　　妨げず　桃李の自ら時に逢うを

向來冰雪凝嚴地　　向来　冰雪の凝ること厳しき地に

力斡春回竟是誰　　力めて春の回るを斡むるは竟に是れ誰ぞ

【通釈】

起句　酒に酔って、散り残りの梅のひと枝ふた枝を折り採って眺めやる、

承句　桃や李が自分たちのほどよい季節になったと喜んで花を咲かせていることにとやかくは言うまい。

転句　ただ昔から、氷雪が厳しく張り詰めた時節の大地に、

結句　春をよみがえらせようと力いっぱい努めているのは結局誰なのか。(桃李ではないこの梅なのだ)

【語訳】

落梅…花の散り落ちた梅の木。　殘梅…ほとんど花の散った梅。散り残りの梅。

不妨…さまたげない。じゃまをする気はない。　逢時…よい季節にあう。チャンスにめぐりあう。

向來…これまで．従来．　斡…つかさどる．世話する．

竟…ついに．ここでは畢竟、結句の意に解す。

【押韻】

平声支韻。枝、時、誰、

【解説】

陸　游(一一二五―一二〇九)は南宋、越州山陰(浙江省紹興)の人。字は務觀、號は放翁．范成大、楊萬里と共に南宋の三大詩人に挙げられている．当時南宋は北方金の圧迫に苦しんでおり、陸游は死ぬまで主戦論者で後年憂国詩人と呼ばれている．

官途について後の陸游の一生は、主戦派と和睦派の政争による浮沈のくり返しであったが、晩年の二十年は殆ど政界から斥けられ、故郷紹興にて自ら耕し国を憂えつつ八十五歳の生涯を終えた．

陸游は梅を愛し多くの梅の詩を残しているが、この詩は紹興に隠退して二年目作者六十八歳の年の作．

詩は残梅に政争に敗れ斥けられている自らおよび主戦派を重ね、今をときめく和睦派を桃李に擬し、真に

国運の回復に努めているのは我々だと主張する諷諭詩として読むのが妥当だと思われる。憂国詩人陸游を偲ばせる作品です。

9 弘道館賞梅花　　弘道館に梅花を賞す　　徳川齊昭

弘道館中千樹梅　　弘道館中　千樹の梅

清香馥郁十分開　　清香　馥郁として十分に開く

好文豈是無威武　　好文　豈これ威武無からんや

雪裏占春天下魁　　雪裏　春を占む天下の魁

【通釈】

起句　弘道館の庭の千本もの梅の木は、

承句　いま清らかな香り馥郁と十分に開いている。

転句　梅は古来文を好む木と呼ばれているが、どうして文だけで武が無いことがあろうか。

結句　雪の積もる中で、ほしいままに春を独り占めして天下のさきがけとなるのは、強く勇ましい力が無くては出来ないことなのだ。

【語釈】

弘道館…水戸藩の藩校の名。　馥郁…香り高いさま。香気の盛んなさま。

好文…学問を好む。ここでは好文木の略。好文木は梅の別名。晋の武帝の故事による。

　晋の武帝が若く学問を好んでいた時は梅の花が開いたが、学問をやめると開かなくなった。

豈…反語。どうして……であろうか、そうではない。

威武…強く勇ましい力。　雪裏…雪の積ったなか。雪の降るなか。

魁…さきがけ。かしら。

【押韻】

平声灰韻。梅、開、魁、

【解説】

徳川齊昭（一八〇〇―一八六〇）は江戸時代末期の水戸藩主。烈公と呼ばれ、尊王攘夷をとなえた。

藤田東湖等尊王の士を重用して藩政改革を断行、水戸に藩校弘道館を設立、文武両道にわたり子弟の教育に力を注いだ。

この詩は弘道館の庭に植えた千樹の梅にことよせて、水戸教学への思いを詠じたもので香り高い作品となっています。

10 芳野懐古　　藤井竹外

古陵松柏吼天飆　　古陵の松柏　天飆に吼え
山寺尋春春寂寥　　山寺　春を尋ぬれば春寂寥
眉雪老僧時輟帚　　眉雪の老僧　時に帚くを輟め
落花深處説南朝　　落花深き処　南朝を説く

【通釈】

起句　後醍醐天皇の古い御陵に生い茂っている松や柏の木々は、つむじ風にごうごう吼えるように鳴っている。

承句　この吉野の山寺に春の風情を尋ねて来てみると、辺りはひっそりと静まりかえっている。

転句　寺の庭では、雪のように白い眉の老僧が一人掃除をしていたが時々掃く手を休めては、

結句　桜の花びらが深く散り積もっいる中で、過ぎし昔の南朝のことどもを物語ってくれた。

【語釈】

芳野…吉野の雅称。　古陵…古いみささぎ。ここでは後醍醐天皇陵。

松柏…松と柏。柏は檜やびゃくしんの類。（かしわではない）

天飆…空高く吹く強風。飆はつむじ風。旋風。　寂寥…ひっそりとしてもの寂しいさま。

眉雪…眉毛が雪のように白いこと。　輟…やめる。中途でやめる。　帚…はく。掃く。

【押韻】

平声蕭韻。飆、寥、朝、

【解説】

藤井竹外（一八〇七―一八六六）　名は啓。高槻藩士で頼山陽に学び漢詩に長じた。晩年は隠居して、梁川星巌や広瀬淡窓などとも交った。江戸時代末期、勤王思想の高まりとともに吉野を詠ずる詩が多く作られた中でこの詩は最も親しまれた傑作で、後に掲げる（付三）梁川星巌の「芳野懐古」・（付四）河野鐵兜の「芳野」と共に吉野三絶と称せられています。

なおこの詩の手法は唐の詩人元稹の詩行宮（付二）に倣っていることが知られています。

付二　行宮　　行宮　　元稹

寥落古行宮　　寥落たり古行宮
宮花寂寞紅　　宮花寂寞として紅なり
白頭宮女在　　白頭の宮女在り
閑坐説玄宗　　閑坐して玄宗を説く

付三　芳野懐古　　芳野懐古　　梁川星巌

今來古往事茫茫　　今来　古往　事茫茫
石馬無聲抔土荒　　石馬　声無く　抔土荒る
春入櫻花滿山白　　春は桜花に入って満山白く
南朝天子御魂香　　南朝の天子　御魂香し

付四　芳野　　芳野　　河野鐵兜

山禽叫斷夜寥寥　　山禽叫断　夜寥寥
無限春風恨未銷　　無限の春風　恨未だ銷えず
露臥延元陵下月　　露臥す延元陵下の月
滿身花影夢南朝　　満身の花影　南朝を夢む

11 雨晴　雨晴る　王駕

雨前初見花間蕊　雨前初めて見る花間の蕊
雨後兼無葉裏花　雨後兼ねて無し葉裏の花
蛺蝶飛來過牆去　蛺蝶飛び来って牆を過ぎて去る
卻疑春色在隣家　却って疑う春色は隣家に在るかと

【通釈

起句　雨の降る前に、花は蕊がやっと見える程に開いたばかりであったのに、
承句　雨があがって見ると、もう茂った葉の中に花は全く無い。
転句　蝶がひらひらと飛んで来たが、かきねを過ぎて行ってしまった。
結句　ふと思う、春景はもう隣の家に行ってしまったのだろうかと。

【語釈】

初…はじめて。……したばかりの意。　蕊…しべ。花蕊。
兼…この場合は盡の意。無を強調したもの。　蛺蝶…①蝶の総称。②あげは蝶。
牆…かきね.　卻疑…ふと疑う。卻はそのようなことはないのにの意。
春色…春の

【押韻】

平声麻韻。花、家、起句は踏み落とし。
この詩のように、起句・承句が対句の場合、多くは起句を踏み落とす。

【解説】貸
王　駕は晩唐の人。字は大用。昭宗の大順元年（八九〇）進士及第。自ら守素先生と号した。
この詩は、庭の春景色の移ろいを軽妙なタッチでさらりと詠じたもので、読後に爽やかなあと味をのこしてくれる佳作です。なおこの詩は一本では詩題を晴景としているが，ここでは全唐詩に従った。

12 春風

春風　　白居易

春風先發苑中梅　　春風　先ず發く苑中の梅
櫻杏桃梨次第開　　櫻杏桃梨　次第に開く
薺花榆莢深村裏　　薺花榆莢　深村の裏
亦道春風為我來　　亦道う春風　我が為に来たると

【通釈】
起句　春風が吹いて来て、まっ先に御苑の梅の花を綻ばせると、
承句　桜、杏、桃、梨等の花々が次ぎつぎと咲いてゆく。
転句　都から離れた草深い田舎の里では薺の花や榆の莢もまた、
結句　春風がわれわれの為に吹いて来たと喜ぶのだ。

【語釈】
苑…草木を植えた庭園。宮中の庭園。御苑。
櫻…ゆすらうめ。桜桃。苑に植えて実を食す。　次第…順序。つぎつぎに。順次に。
薺…なずな。ぺんぺん草。
榆莢…榆は樹木の名、にれ。春、新芽に先立つて莢のある小花を付ける。榆莢はその莢。
亦…もまた。……もまた……である。

【押韻】
平声灰韻。梅、開、來、

【解説】
白　居易（七七二―八四六）字は樂天は中唐の大詩人。官は高位にのぼり、当代最高の文人としての名声を擅にし、当時稀にみる七十五歳の長寿と清らかな晩節を全うした稀有の人。
この詩は作者六十歳頃の作とされている。この頃白　居易は政争を嫌い中隠と称して洛陽郊外に隠棲し、仏教への傾倒を深めていた。詩は、起句・承句に梅に始まつて次々と綻ぶ苑中の花々を詠じて都で春を謳歌する高貴人達を思わしめ、転句・結句ではこれまであまり詩中に入ることの無かった野生の薺や榆に目を向けて、都から離れた村里で春を楽しむ素朴な庶民の生活を思わしめている。津々浦々にあまねく春の恵み、政治もかくかくあるべしとの含意とも受け取れるし、亦足るを知る生きざまへの共感とも受け取れる、白居易の詩らしく用語はすべて平易ながら味わい深い逸品です。

13 早春　　早春　　趙　雍

高巻珠簾日漸長　　高く珠簾を巻けば日漸く長く
梅花庭院雪飄香　　梅花の庭院　雪香りを　飄す
閑倚闌干看新柳　　閑に闌干に倚りて新柳を看る
不知誰爲染鵝黃　　知らず誰が為にか鵝黃を染む

【通釈】

起句　真珠の飾りのついた美しい簾を高く巻き挙げれば、春の日は次第に長くなって、

承句　中庭には、雪かとまがう梅の花が香りを放ちながら舞っている。

転句　のどかに闌干に寄りかかって、芽吹いたばかりの柳をつくづくと眺めやる。

結句　いったい誰の為にこんなに美しい黄色に身を染めているのだろう。

【語訳】

珠簾…真珠で飾ったすだれ。美しい簾。　漸…ようやく。次第に。

庭院…中庭。屋敷。　閑…のどか。しずか。

倚…もたれる。よりかかる。　看…よく見る。熟視する。　新柳…あらたに芽を出した柳。

鵝黃…鵝(がちよう)の雛の羽毛が黄色で美しいことから、黄色で美しいもののたとえ。(柳・酒など)

【押韻】

平声陽韻。長、香、黃、

【解説】

趙　雍(一二九0?―?)は元の人。元朝に仕え、書と画に巧であつた。

この詩は、日一日と春めいてくる早春の中庭の情景を、雪かとまがう純白の梅花の香りに淺黃色に芽吹く柳姿を加えて美しく映出し、待ちに待った春の到来を喜ぶ作者のしみじみとした情感を詠出した佳作です。

14 閨怨　　閨怨　　王　昌齡

閨中少婦不知愁　　閨中の少婦　愁いを知らず
春日凝粧上翠樓　　春日　粧いを凝らして翠楼に上る
忽見陌頭楊柳色　　忽ち見る陌頭　楊柳の色
悔教夫壻覓封侯　　悔ゆらくは夫壻をして封侯を覓めしめしを

【通釈】

起句　婦人部屋の若妻は、まだ人の世の愁いも知らず、

承句　うららかな春の日に念入りにお化粧をしては、美しい高殿からぼんやりと景色を眺めている。

転句　ところが、ふと街路のほとりの柳の芽ぶく色を見て、

結句　急に夫が恋しくなり、出世をもとめて夫を戦場に送り出したことを後悔するのだ。

【語釈】

閨怨…夫と離れている妻の悲しみ、恨み。　少婦…年若い人妻。

凝粧…念入りに化粧する。厚化粧をする。　翠樓…青く塗った高殿。婦人の住居の形容。

忽…にわかに。ふと。　陌頭…街路のほとり。

楊柳…柳。楊はねこやなぎ、柳はしだれやなぎ。

唐代、人を送別する時、無事の帰還を祈って柳の小枝を輪にして贈る風習があった。ここでは柳を見て夫を送り出した時を思い出したのであろう。

教…使役の助動詞。……をして……せしむ。　夫壻…おっと。夫。夫婿。

覓…もとめる。求。　封侯…侯（領主・大名）に封ぜられること。

【押韻】

平声尤韻。愁、樓、侯、

【解説】

王昌齢（六九八―七五五？）は盛唐の人。七二七年進士及第、官途についたが細行にこだわらぬ性格から官職は不遇であった。詩人としては李白、孟浩然等と深く交わり、多くの美しい詩をのこした。特に宮怨（宮女のかなしみ）、閨情等の詩に関しては古今独歩と評せられている。

この詩はその代表作の一つで、起承転結の巧な構成により若妻の思いを美しく唱いあげた佳作です。

15 清明

清明（せいめい）　杜牧（とぼく）

清明時節雨紛紛　清明の時節（せいめいのじせつ）　雨紛紛（あめふんぷん）

路上行人欲斷魂　路上の行人（ろじょうのこうじん）　魂を断（こんをた）たんとす

借問酒家何處有　借問す酒家（しゃもんしゅかい）何れの処（いずところ）に　か有（あ）る

牧童遙指杏花村　牧童遥かに指（ぼくどうはるか）さす　杏花村（ゆびきょうかそん）」

【通釈】

起句　春の盛りの清明の好時節だというのに、雨が降りしきり、

承句　旅を行く私の心はすっかり滅入るばかり。

転句　「ちょっと尋ねたいのだが、酒を売っている店は何処に有るのかな？」

結句　すると牛飼いの子供が、遥かかなたの杏の花咲く村を指さしてくれた。

【語釈】

清明…二十四節気の一つ、春分から十五日目、陽暦の四月五日頃に当る。この時節に降る雨を杏花雨と呼ぶ。

紛紛…乱れるさま。乱れ飛ぶさま。多いさま。　行人…道を行く人。旅人。

斷魂…非常にいたましく悲しいことのたとえ。魂も消え入るばかり。

借問…問う。…質問する。　酒家…酒屋。

牧童…牛飼いの子供。　杏花村…あんずの花盛りの村。

【押韻】

平声文韻。紛、と　平声元韻。魂、村、の通韻。

【解説】

杜　牧（八〇三―八五二）は晩唐期を代表する詩人。京兆（陝西省西安）の生れ。家は祖父や親族に宰相を出した名門。二十六歳で進士及第、官僚の道を歩んだ。若くして酒と風流を愛し、風流才子と呼ばれ多くの洒脱な詩を残した。

この詩は、降りしきる雨の中を行く旅人、そこに出あった牧童とのやりとりを、遥かにけぶる杏の花咲く村を背景に、さながら一幅の禅画を見るように詠出した傑作です。特に転結句が絶妙です。

中国には「杏花村」という村や銘酒があるそうですが、恐らくはこの詩にあやかったものでしょう。

なお、この詩は杜牧の作ではないという説もありますが、詩の格調は杜牧の作として鑑賞するに充分です。

16 春夜

春夜　蘇軾

春宵一刻直千金
花有清香月有陰
歌管樓臺聲寂寂
院鞦韆落夜沈沈

【通釈】

起句　春の宵のひとときは、千金の値うちがある。

承句　花は清らかな香りを放ち、月はおぼろにかすんでいる。

転句　たかどのから聞こえていた歌声や笛の音もひっそりと静まり、

結句　ぶらんこに乗る人もいない中庭に、夜は静かにふけてゆく。

【語釈】

一刻…ひととき。わずかな時間。　直…あたい。値に通じる

月有陰…月がおぼろにかすんでいる。陰はくもる意。　歌管…歌声と笛の音。

樓臺…たかどの。楼閣。　寂寂…ひっそりと静かなさま。

鞦韆…ぶらんこ。当時女子の遊びであった。　院落…中庭。
沈沈…夜のふけるさま。静かなさま。

【押韻】
平声侵韻。 金、陰、沈、

【解説】
花かおるおぼろ月夜の風情を美事に詠じた七絶です。この詩は古来日本人に最も愛された漢詩の一つで、俳句や謡曲などに多く引用されており、特に起句を知らぬ人はまれでしょう。
蘇 軾（一〇三六―一一〇一）は北宋最高の詩人であり大文豪。二十二歳で科挙進士及第、高級官僚の道を歩んだが後年政争に因り波乱多い一生をおくった。この詩は若年時の作とされている。

17 尋胡隱君

胡隱君を尋ぬ　　高 啓

渡水又渡水　水を渡り　又水を渡り
看花還看花　花を看　還た花を看る
春風江上路　春風　江上の路
不覺到君家　覚えず　君が家に到るを

【通釈】
起句　川の水を渡り、また川の水を渡り、
承句　花をながめ、更にまた花をながめながら、
転句　春風に吹かれて川沿いの路を行くと、
結句　知らぬ間にあなたの家に着いていました。

【語釈】
胡隱君…隠者の胡なにがし。胡は人名。隠君は隠者の尊称。隠君子。世をのがれた有徳の人。
水…川やクリークをさす。江南地方はクリークが網の目のように多い。
還…また。　江上…川沿い。川のほとり。川のことを北方では河と呼び南方では江と呼ぶ。
不覺…気がつかない。

【押韻】
平声麻韻。 花、家、

【解説】
江南ののどかな春の風景を唱いあげた傑作です。水郷の花咲く路を一人悠悠と隠者を尋ねる姿が眼前に浮かぶようです。
詩の平仄の構成は変格で、起句は渡水という仄字を重ねて用いてすべて仄字で構成し、承句は看花の字を重ねてすべて平字としていますが、これを対句とすることにより詩趣の美事な表現に成功しています。

高　啓（一三三一―一三七四）は明代初期第一の詩人。蘇州の生れ。元朝末期の戦乱を避け呉淞（上海の郊外）に閑居した。この詩はその頃の作と思われます。

なお、その後本人は明の太祖の召しに応じて「元史」の編纂に当たったが、太祖の怒りに触れ処刑された。

18

宴城東莊

城東の莊に宴す　　崔　惠童

一月主人笑幾回　　一月　主人笑うこと幾回ぞ

相逢相値且銜杯　　相逢い相値うて且く杯を銜まん

眼看春色如流水　　眼に看る春色　流水の如きを

今日殘花作日開　　今日の殘花　作日開きしなり

【通釈】

起句　心のそこからの笑いは一月のうちに何回あるだろうか、そんなに多くはない。

（荘子に「一ヶ月の中に四・五日に過ぎざるのみ」とあるが、この別荘のあるじである私も同じ思いだ。）

承句　こうしてお互い逢った時には、ともかく酒を酌み交わし心の底から楽しもうではないか。

転句　眼前に看ている今は盛りの春景色も、流れる水のように過ぎ去ってしばらくも留まらない。

結句　今日凋んでしまっている花も作日開いたばかりなのだ。

【語釈】

一月…ここでは一ヶ月の中の意。

主人…この別荘のあるじ。崔　惠童自身。

相逢相値…逢は両方から出あう。値はちょうど出あう。ここでは同じ意味の字を重ねて意を強調したもの。

銜杯…酒をのむこと。銜は口にくわえる意。　且…ともかく。とりあえず。

眼看…目の前にみる。まのあたりに見る。　春色…春景色。

殘花…しぼんだ花。そこなわれた花。散り残った花。

【押韻】平声灰韻。回、杯、開、

【解説】

崔　惠童は唐代の人。玄宗皇帝の皇女・晋國公主を妻とした。

この詩は作者の別荘に弟（一説に従弟）の崔　敏童を招き宴会を催した時の作。敏童が先ず左記の一詩を作り、惠童がそれに和したものとされ、いずれも唐詩選に収録されている。

宴城東莊　　城東の莊に宴す　　崔　敏童

一年始有一年春　　一年　始めて一年の春有り

百歲曾無百歲人　　百歲　曾て百歲の人無し

能向花前幾回醉　　能く花前に向いて幾回か醉わん

十千沽酒莫辭貧　　十千　酒を沽いて貧を辞すること莫かれ

右の崔 敏童の詩の承句は、荘子盗跖篇「人、上寿は百歳、中寿は八十、下寿は六十。病瘦・死喪・憂患を除けばその中、口を開いて笑う者一月の中、四・五日に過ぎざるのみ」を踏まえている。これに応じて崔 惠童詩も同じ荘子の続きの部分を上手に引用している。詩は人生の無常への思いを悠然と美しく詠じた佳作と云えます。特に結句の着想が秀逸です。

なお、この詩の起句、四字目が孤平であることが古来指摘され、「主人」は「人生」の誤りであるとの説が一般的です。

19 春雨後　　春雨の後　　孟郊

昨夜一霎雨　　昨夜 一霎の雨

天意蘇群物　　天意 群物 を 蘇らす

何物最先知　　何物ぞ 最も先に知るは

虚庭草争出　　虚庭 草 争い出づ

【通釈】

起句　昨夜のひとしきりの雨、

承句　いよいよ、天のおぼしめしが万物を蘇らせようとしているのだ。

転句　それを最も先に知るのは何物だろう、

結句　それは、今まで何も無かった庭に、先を争うように芽を出し始めた草々だ

【語釈】

霎…こさめ。霎雨はひとしきり降る雨。　天意…天の心。天の意志。

群物…もろもろの物。万物。　虚庭…何も無い庭。がらんとした庭。

【押韻】

入声物韻。物、　入声質韻。出、の通韻。

【解説】

孟　郊（七五一―八一四）は中唐の人。字は東野。はじめ嵩山に隠棲していたが、母に励まされて学に志し何度も落第の後、四十六歳の時科挙に及第した。韓愈に認められ生涯の交わりを結んだ。官途についたが役所の仕事を好まず、専ら郊外出て詩を作っていた為減給され生活は貧しかった。

苦吟で知られ、作風は研ぎすまされた感性の凝縮した詩を作り、賈島（七七九―八四三）の作風と併せて「郊寒島瘦」（孟郊の詩は寒々としており、賈島の詩は痩せている）と称された。

この詩は、平易な用語の中に一夜の春雨の後の庭先の何気ない風情を詠じ、そこに自然（天）の意志を見る感動と、更には庭に一斉に萌え出る草々への愛情さえも感じさせる、強く美しい作品となっています。

付五　遊子吟　　孟郊

慈母手中線　　慈母　手中の線
遊子身上衣　　遊子　身上の衣
臨行密密縫　　行に臨み　密密に縫う
意恐遲遲歸　　意に恐る　遲遲として帰らんことを
誰言寸草心　　誰か言う　寸草の心
報得三春暉　　三春の暉に報い得んと

20 登科後　　孟郊

昔日齷齪不足誇　　昔日の齷齪　誇るに足らず
今朝放蕩思無涯　　今朝放蕩　思い涯無し
春風得意馬蹄疾　　春風に意を得て馬蹄疾く
一日看盡長安花　　一日看尽くす長安の花

【通釈】

起句　かって受験勉強に明け暮れた日々は、小さい事にこだわりこせこせと、何の自慢にもならない毎日であった。

承句　しかし合格した今は解き放たれて、ほしいままに思いははてしなくひろがっゆく。

転句　心地よい春風のもと、馬蹄の音も軽やかに馳せて、

結句　一日じゆう、都長安の花という花をすべて見つくすのだ。

【語釈】

登科…科挙に合格すること。科挙は隋代に始まり、清代まで続いた中国の伝統的な高級官吏登用試験。

昔日…むかし。さきごろ。　齷齪…こせこせするさま。小さい事にこだわるさま。

放蕩…ほしいまま。　得意…望みどおりになること。心地よいこと。

馬蹄…馬のひづめ。又人の乗っている馬。　長安…唐の時代の都。長安の町。

【押韻】

平声麻韻。　誇、涯、花、

【解説】

春は昔も今も、試験合格発表の季節でもある。この詩は科挙及第の喜びを詠じたもの。何度も落第した後貞元十二年(七九六)ようやく及第、已に四十六歳になっていた。この積年の努力が報われた喜びが詩全体から感じとれる。当時、科挙合格者は先ず長安の曲江で宴を開き、更に都内各処の名園の花を見て回るならわしであつたという。

尚、孟郊には落第した時の詩も複数残されており、その一詩を左に掲げます
両詩を併せて、古今を通じて変らぬ受験の哀歓を感動深く詠じた作品です。

付六　再下第　　孟郊

一夕九起嗟　　一夕　九たび起きて嗟く。
夢短不到家　　夢は短くして家に到らず
兩度長安陌　　両び度る長安の陌
空將涙見花　　空しく涙を将って花を見る

21 曲江春草

曲江の春草　　鄭谷

花落江隄簇暖煙　　花落ちて江隄に暖煙簇り
雨餘草色遠相連　　雨余の草色　遠く相連なる
香輪莫輾青青破　　香輪　青青を輾り破ること莫く
留與遊人一醉眠　　遊人に留与して一醉眠せしめよ

【通釈】

起句　花が散った後の曲江の隄には、暖かい春がすみがたなびき、
承句　雨あがりの若草の色が遠く連なっている。
転句　その中に乗り入れて来る美しい馬車よ、どうかこの青々とした草をひきつぶしてしまわないで、
結句　ここで春を樂しんでいる遊人がちょっと酔って睡るくらいの余地は残しておいてもらいたい。

【語釈】

曲江…長安の東南隅にあった池苑の名。水流が屈曲しているのでこの名がある。初め漢の武帝がこの地に宜春苑を造り、唐の開元年間に疏鑿を加え池畔に紫雲樓、芙蓉苑、杏園、慈恩寺、樂遊原等の勝地あった。
　唐代、春その年の進士及第者に曲江にて皇帝から宴を賜った。
暖煙…あたたかいもや。煙はもや。かすみ。　雨餘…雨あがり。雨降りのあと。
香輪…立派な馬車。高貴の馬車。　輾破…車輪が物をひきつぶす。
青青…青々とした草。　留與…とどめあたえる。　醉眠…酒に酔って眠る。

【押韻】

平声先韻。煙、連、眠、

【解説】

鄭　谷(八四二?―九一０?)は唐、袁州(江西省)の人。字は守愚。光啓三年(八八七)進士及第、右拾遺、都官老中に到った。末唐期の芳林十哲の一人に数えられる。
唐代、春のはじめに野外に遊び飲食することを踏青と云い、二月二日を一節と呼んだ。

この詩は、曲江での踏青の模様をさらりと詠じた佳作であるが、或いは作者自身科挙に落第した時の作とし、転句の香輪は皇帝の賜宴に集う及第者達のもの、結句の言わんとするところは「少しは落第者の身にもなってくれと解することも出来る。

今日の我が国の春の花見の喧騒さえ思わせる作品です。

付七　偶興　　偶興　　羅　隱

逐隊隨行二十春　隊を逐い行に随う　二十春

曲江池畔避車塵　曲江の池畔に車塵を避く

如今贏得將衰老　如今　贏ち得たり衰老を将て

閑看人間得意人　閑に看る　人間得意の人

22 鍾山即事

鍾山即事　　王　安石

澗水無聲遶竹流　澗水声無く竹を遶って流れ

竹西花草弄春柔　竹西の花草　春柔を弄す

茅簷相對坐終日　茅簷相対して坐すること終日

一鳥不啼山更幽　一鳥啼かず　山更に幽なり

【通釈】

起句　谷川の水はせせらぎの音も無く、庭の竹をめぐって流れており、

承句　竹の茂っているあたりの西側では、咲き乱れている花々や萌え出たばかりの草々が春の柔らかな姿を存分に見せている。

転句　かやぶきの軒端で、鍾山と向いあって一日中坐っていると、

結句　周囲は鳥一羽鳴くでもなく、山はいっそう奥深い静けさを増すばかりである。

【語釈】

鍾山…南京(江蘇省)の郊外にある山の名。王　安石は晩年この山の近くに隠居した。

即事…その場のことを題材として詩を作ること。　澗水…谷川。

弄春柔…春の柔らかさを存分に具現している。　茅簷…茅葺きののきば。又その家。

【押韻】

平声尤韻。流、柔、幽、

【解説】

王 安石（一〇二一―一〇八六）は北宋の大政治家であり、文豪且つ大詩人。臨山（江西省）の人。二十二歳の若さで進士及第。長く地方勤務し、政治の腐敗と国力の衰退を嘆き政治改革を提唱。五十歳の時、神宗皇帝の信任を得て宰相となり、その後六年間いわゆる新法改革を断行し、退任後南京郊外に隠居した。しかし、多くの政敵を作り、神宗皇帝の死後は新法党・旧法党のはてしない政争を生じ、終に国力は回復せず、北宋は金の侵略により滅亡した。

この詩は王安石が宰相を辞し鍾山の近くに隠退した後の悠然とした自らの心境を、彼が最も愛した鍾山を引き合いとして詠じた佳作です。

転句は、左に掲げる李白の詩「獨坐敬亭山」を意識しており、また結句は六朝梁の王籍の詩「入若耶溪」が念頭にあること明らかです。

獨坐敬亭山　　独り敬亭山に坐す　　李 白

衆鳥高飛盡　衆鳥 高く飛んで尽き
孤雲獨去閑　孤雲 独り去って閑なり
相看兩不厭　相看て両つながら厭わざるは
只有敬亭山　只だ敬亭山有るのみ

入若耶溪　　若耶溪に入る　　（梁）王 籍

艅艎何泛泛　艅艎 何ぞ泛泛たる
空水共悠悠　空水 共に悠悠たり
陰霞生遠岫　陰霞 遠岫に 生じ
陽景逐迴流　陽景 迴流を逐う
蟬噪林逾靜　蟬 噪しうして林 逾 静に
鳥鳴山更幽　鳥 鳴いて山更に幽なり
此地動歸念　此の地 帰念を動かし
長年悲倦遊　長年 倦遊を悲しむ

23 絶句　　絶句　　杜 甫

江碧鳥逾白　江は碧にして鳥 逾 白く
山青花欲燃　山は青くして花燃えんと欲す
今春看又過　今春 看 又過ぐ
何日是歸年　何れの日か是れ帰年ならん

【通釈】

起句　春の江水は満々と深いみどりの色をたたえ、その水面に浮かぶ白鳥の白はいよいよ鮮やかに目にしみ

る。

承句　周辺の山々はさ緑に包まれ、その中に花々は燃え立つように紅く咲きほこっている。

転句　今年の春もまた、こうして看ているまに過ぎてゆく。

結句　世の中の乱れが収まり、我がふるさとに帰れる年はいつのことであろうか。

【語釈】

江…ここでは長江(揚子江)の支流で蜀(四川省)成都を流れる錦江を指す。

一般に長江以南では大きな川を江と呼び、北方では河と呼ぶ。

碧…深いあおみどり色。　逾…いよいよ。ますます。

燃…火が燃え立つように紅く照りはえる意。

看…みすみす。見ているまに。時間や状態がすみやかに経過する意。

歸年…故郷に帰る時期。

【押韻】

平声先韻。燃、年、

【解説】

杜　甫(七一二―七七〇)は李白と並び盛唐詩人の双璧をなし、李白が詩仙と呼ばれるのに対し詩聖と呼ばれる。鞏縣(河南省)に生れ若くして各地を遊歴の後長安に上り科挙に挑み失敗。四十四歳の時低い官職を得た直後、安禄山の乱が起り大いに苦しみます。更にその後打ち続く兵乱と長安の大飢饉に見舞われ、四十八歳の時家族を伴なって長安を離れ、蜀の成都に難を逃れこの地に滞在します。

この詩はその頃の作とされています。心ならずも故郷を離れ、帰郷の見通しも無いままに異郷の地に空しく春景色を眺めるやるせない心境を詩に託したものです。詩題の「絶句」は深刻な思いを表す適当な題名が思い浮かばなかったことに由るものでしょう。杜甫には「絶句」と題した詩が他にもあります。。

今日現在(平成二十四年五月)東日本大震災と放射能の害から逃れ、異郷の地での生活を余儀なくされている人々に思いを馳せつつこの詩を選びました。帰年の一日も早からんことをお祈り致します

〔参考〕東日本大震災。発生日時・平成二十三年三月十一日。避難者・二万九千余人。

24 山中問答　　山中問答　　李白

問余何意棲碧山　余に問う 何の意ありてか碧山に棲むと

笑而不答心自閑　笑って答えず 心 自から閑なり

桃花流水窅然去　桃花流水 窅然として去る

別有天地非人間　別に天地の人間に非ざる有り

【通釈】

起句　人は私に、どういう考えで緑深い山中にひきこもっているのですかとたずねるが、
承句　ただ笑って答えない。しずかでのどかな私の心の中は簡単に説明出来るものではない。
転句　咲きみだれる桃の花が流水の上に散り、はるかに流れ去ってゆく。
結句　ここには、俗世間とは違う別の世界があるのだ。

【語釈】
何意…どういう考え。　棲…すむ。いこう。隠棲する。
碧山…樹木の青々と茂った山。　閑…のどか。しずか。
桃花流水…世俗を離れた別天地「桃源境」を表現する語。陶淵明作「桃花源記」の故事による。昔、晋のとき武陵の一魚夫が桃林中の流れをさかのぼって洞穴に入り、その先方に開けた地に地に出て、秦の遺民の住む別世界に遊んだと。
窅然…奥深く遠いさま。　人間…「じんかん」と読む。俗世間。

【押韻】
平声刪韻。山、閑、間、

【解説】
李　白(七０一―七六二)は西域の生れとされているが、幼くして蜀(四川省)に移り住み、若い時から詩書百家の学に通じたとされる。二十五歳の時三峡を下って蜀を出、諸国を歴遊し多くの詩人と交わり、多くの名詩を残した。特に絶句にすぐれ、李絶杜律(李白は絶句にすぐれ、杜甫は律詩にすぐれる)と、杜甫と並び称せられる。
この詩は、李白五十三歳の頃の作とされている。その前、讒により都長安を逐われてから十年、此の年作者は河北、河南歴遊ののち江南に在った。詩のポイントの一つ承句の「笑而不答」と詠ずるに当り作者の胸底には、陶淵明の詩「飲酒」(左掲)があったであろう。作者が生涯　あこがれ続けた隠逸生活への思いをそのまま詠じた、詩仙李　白の面目躍如の一作です。

飲酒・其五　　飲酒　　陶　淵明

結廬在人境　而無車馬喧　　廬を結んで人境に在り　而も車馬の喧しき無し
問君何能爾　心遠地自偏　　君に問う何ぞ能く爾るやと　心遠ければ地自から偏なり
採菊東籬下　悠然見南山　　菊を東籬の下に採り　悠然として南山を見る
山氣日夕佳　飛鳥相與還　　山気日夕に佳く　飛鳥相与に還る
此中有眞意　欲辨已忘言　　此の中に真意有り　弁ぜんと欲すれば已に言を忘る

25 山中與幽人對酌　　山中にて幽人と対酌す　　李　白

兩人對酌山花開　　両人対酌して山花開く
一杯一杯復一杯　　一杯一杯復た一杯

我醉欲眠卿且去　我醉うて眠らんと欲す卿且く去れ
明朝有意抱琴來　明朝意有らば琴を抱いて来たれ

【通釈】

起句　二人で向かいあって酒をくみ交わしている庵のまわりには、山の花々が咲いている。
承句　打ちとけて、一杯、一杯、また一杯と杯をかさねるうちに、
転句　私は酔うて眠くなって来た。君、今日は帰りたまえ。
結句　明朝また気が向いたら、琴を抱えて来ておくれ。

【語釈】

幽人…隠者。世を避けて山中にかくれすんでいる人。　対酌…向いあって酒をくみかわすこと。
卿…きみ。同輩または目下の者を呼ぶときに用いた二人称。
且…ちょっと今日のところはの意。この場合「しばらく」は時間的しばらくではない。
有意…気が向いたなら。
琴…当時、男子は教養として詩・書の他琴を弾いた。当時の琴は持ち運べる大きさであった。

【押韻】

平声灰韻。開、杯、來、

【解説】

李　白は生涯多くの文人・詩人は勿論、上は皇帝及び官僚や地方の有力者から下は市井人に到る巾広い階層の人々と交わり、広く敬愛された。本人は中でも隠者或いは道士と呼ばれる人々に特別の親しみを抱いていたように思われるふしがある。実際に彼自身、一時廬山に身を隠した。時は安史の乱で世が騒然とした李　白五十六歳の事であつた。

この詩はその廬山隠棲当時の作として鑑賞するのが最もふさわしい。詩は李　白らしい明快な調子で屈託のない隠者の生活を詠いあげたもので、特に承句の「一杯一杯復一杯」は型破りの表現であるが詩全体をじっくり味わえば、山中草庵の隠者同志の対酌の様子が一幅の画のように浮かびあがってくる、美事な作という他はない。

尚転句と結句は〔陶淵明傳〕に見える左記の故事が下敷きとなっています。

「淵明は音律を解せず、而れども無絃琴一張を蓄え、醉うて適する毎に輒ち撫弄して以てその意を寄す。貴賤の之に造れる者には酒有れば輒ち設く。淵明若し先に醉えば、便ち客に語ぐ「我醉うて眠らんと欲す、卿去る可し」その眞率なること此の如し。〔陶淵明傳・梁、蕭　統撰〕

付八　黄鶴樓送孟浩然之廣陵　　黄鶴楼にて孟浩然の広陵に之くを送る　　李　白

故人西辭黃鶴樓　故人西のかた黄鶴楼を辞し
烟花三月下揚州　烟花三月揚州に下る
孤帆遠影碧空盡　孤帆の遠影碧空に尽き
唯見長江天際流　唯見る長江の天際に流るるを

26 春日雑詩

春日雑詩　　袁枚

千枝紅雨萬重煙　　千枝の紅雨　万重の煙
畫出詩人得意天　　画き出す詩人得意の天
山上春雲如我懶　　山上の春雲は　我が懶の如く、
日高猶宿翠微巔　　日高くして　猶お　宿す翠微の巔

【通釈】

起句　多くの木々の枝から紅の雨のように散りしきる花びらと、幾重にも棚引く春がすみと、
承句　まるで詩人が最も好む一幅の風景画のようだ。
転句　山上に懸かっている春の雲は、私のものぐさに似て、
結句　日はすっかり高くのぼっているのに、依然として山の八合目あたりに宿ったまま動こうとはしない。

【語釈】

紅雨…くれないの花びらの多く散るさまを雨にたとえていう形容。
煙…かすみ。もや。　　得意…自分の心にかなうこと。心地よいこと。
懶…おこたる。なまける。ものうい。　　翠微…山の八合目あたり。

【押韻】

平声先韻。　煙、天、巔、

【解説】

袁　枚（一七一六―一七九七）は清朝中期の文人。字は子才。號は簡齋。錢塘（浙江省）の人。少にして才名あり、進士及第、官途につき各地の長官を歴任した。退官の後、江寧（南京）の小倉山に園を作り随園と名づけてここに住み、吟詠と著作を事とし盛名を得八十二歳で没した。
この詩は袁　枚の代表作の一つで美しく且つものうい江南の春景色を美事詠じた佳作です。

27 過南鄰花園

南隣の花園に過ぎる　　雍陶

莫怪頻過有酒家　　怪しむ莫かれ頻りに酒有る家に過ぎるを
多情長是惜年華　　多情　長に是年華を惜しむ
春風堪賞還堪恨　　春風は賞するに堪え還恨むに堪えたり
纔見開花又落花　　纔かに開花を見れば又落花

【通釈】

起句　しきりに酒家に立ちよるのを怪しまないでほしい。

承句　物事に感じ易い自分は、いつも月日の過ぎてゆくのを惜しんで、その憂いをまぎらわせようとしているのだ。

転句　春風は、ほめたたえ楽しむべきものであるが、また恨めしいものでもある。

結句　やっと花を咲かせたかと思うと、すぐにまた花を散らせてしまうのだ。

【語釈】

過…よぎる。立ちよる。　多情…物事に感じやすいこと。

長…とこしえに。常に。　惜年華…月日の過ぎ易いのをおしむ。年華は歳月、月日。

纔…やっと。かろうじて。

【押韻】

平声麻韻。家、華、花、

【解説】

雍陶（八〇五―？）は晩唐の詩人。成都（四川省）の人。字は國鈞。大和（八二七―八三五）の間に進士及第の後、國子博士となり簡州・雅州（いずれも四川省）の刺史を経て晩年は廬山に隠棲したという。賈島などと親交した。

この詩は、惜春の詩であると同時に歳月の経過の速いことを歎じたもの。待ちに待った春が訪れたかと思うと見る間に過ぎてゆくさまを、春風の仕業に仕立て賞し又恨むと詠じた手法は美事で、美しく味わい深い作品となっています。

28 城西訪友人別墅

城西に友人の別墅を訪ぬ　雍陶

灃水橋西小路斜　灃水の橋西　小路斜めなり

日高猶未到君家　日高くして猶お未だ君が家に到らず

村園門巷多相似　村園　門巷　多くは相似たり

處處春風枳穀花　処処の春風　枳穀の花

【通釈】

起句　灃水にかかる橋を西に渡ると、細い田舎道がうねうねと続いている。

承句　日はもう高く上っているのだが、まだ君の家にたどり着けない。

転句　村里の家々の庭園や門構えの小路は皆似かよっていて。

結句　春風のそよぐ中、あちらにもこちらにもまがきの枳穀の花が白く咲いている。

【語釈】

城西…都市の西。城は都市のまわりを囲んでいる壁、又その都市をいう。

別墅…別荘。別宅。墅は田舎の家。
澧水…川の名。湖南省の北部を東に流れて洞庭湖に注ぐ。
門巷…家の門とこみち。巷は町や村の小路。　　處處…どこもかも。到る処。あちらでもこちらでも。
枳穀…からたち。春末に白い小花を開き、秋に果をつける。とげが多くいけがきにする。
【押韻】
平声麻韻。斜、家、花、
【解説】
この詩は作者が澧水の近くの村里の別荘に住む友人を訪ねた時の作。実体験をさらりと平易に詠じたもので、春ののどか村里に車(馬)を進める姿が目に見えるような美しい作品です。

29 山房春事　　山房春事　　岑参

梁園日暮亂飛鴉　　梁園　日暮　乱飛の鴉
極目蕭條三兩家　　極目蕭條たり　三両家
庭樹不知人去盡　　庭樹は知らず　人去り尽くるを
春來還發舊時花　　春来　還発く　旧時の花

【通釈】
起句　(その昔、漢の孝王が多くの賓客を招いて遊園に日を送ったと伝えられるこの)梁園も今はすっかり寂れ、夕暮れ時の空には烏が乱れ飛び、
承句　見渡すかぎり一面もの寂しく、二三軒の民家のほかには何もない。
転句　庭の木々は、曽てこの地で楽しんだ人々が已に死に絶えたことも知らぬげに、
結句　春になればまた、昔ながらの花を咲かせている。
【語釈】
山房…①山中の家。山家。②山寺。　　春事…春興。春のおもむき。
梁園…漢の文帝の子・孝王の荘園で梁(河南省)にあった。孝王は園中に楼台を築き、当時一流の文士を招いて住まわせ、日々遊園を楽しんだ。
極目…見渡すかぎり。　　蕭條…ものさびしいさま。　　春來…春になると。
發…花のひらくこと。　　舊時花…昔ながらの花。昔と同じ花。
【押韻】
平声麻韻。鴉、家、花、
【解説】
岑　参(七一五―七七〇)は盛唐の人。玄宗の天宝三(七四四)年の進士。天宝八(七四九)年以降数年の間、安西節度使や北庭節度使の幕僚となって新疆ウイグル地域に従軍した。また安祿山の乱の時は粛宗の陣に

馳せ参じ右補闕に任ぜられ、杜甫と親交した。
この詩は作者が梁園の廃墟を訪れた時の作で、その寂れた春景色に接し人間世界の栄枯無常を歎じた絶唱
され、転句・結句の表現は後世多くの詩人の踏襲するところとなっている。
一方で、この詩は作者が若年時居住していた嵩山の山中の旧居を後年自ら訪れた時の作で、荒れ果てた
庭園を梁園と表現したのではないかという説がある。それに従えば、この詩のような風景は今日我が国の山
村の到る処に見られるもので、詩はそのまま現代日本人の心に迫ります。漢詩の生命力の豊かさです。

30
贈別　　杜牧

多情却似總無情　多情は却って似たり総て無情なるに
惟覚罇前笑不成　惟だ覚ゆ罇前　笑の成らざるを
蠟燭有心還惜別　蠟燭　心有りて還た別れを惜しみ
替人垂涙到天明　人に替って涙を垂れて天明に到る

【通釈】
起句　ものごとに感じ易い私の心は、あまりの悲しみの為にかえって何も感じない心と同じになってしまった。
承句　ただ気ずいているのは、別れの酒を前にして笑うことが出来ないことだ。
転句　蝋燭も私の悲しみがわかり、共に別れを惜しんでくれ、
結句　私に替って夜明けまで涙を流し続けているのだ。

【語釈】
贈別…通常は、人が旅立つ時にはなむけとして詩文又は物品を贈ることをいうが、心ならずも別れることと
なった人に贈る別れの詩の意に用いる。
多情…物事に感じやすいこと。　　無情…物事に感じる心が無いこと。
罇…酒だる。　　天明…夜明け。

【押韻】
平声庚韻。　情、成、明、

【解説】
杜　牧(八〇三―八五二)は京兆(陝西省西安)の人。晩唐第一の詩人。特に七言絶句に巧であった。家は祖父
や親族に宰相を出した名門。大和二年(八二八)二十六歳の時進士及第し官僚の道を歩んだ。
三十一歳の時、当時国内有数の繁華を誇った揚州に赴任し、二年間在留した。
この詩を贈った相手は、揚州で馴染んだ年若い妓女であったとされている。はかない恋の終りの別れを悲しむ
心情をあやしく詠いあげた、杜　牧ならではの傑作です。
また、杜　牧にはこの揚州での楽しかった自由奔放の青春時代への追憶の詩(左掲付七・付八)があります。

付九 遣懐 懐いを遣る 杜牧

落魄江湖載酒行 江湖に落魄して 酒を載せて行く
楚腰纖細掌中輕 楚腰纖細 掌中に軽し
十年一覺揚州夢 十年一覚 揚州の夢
贏得青樓薄倖名 贏ち得たり青楼薄倖の名

付十 題禪院 禅院に題す 杜牧

觥船一棹百分空 觥船一棹 百分空し
十載青春不負公 十載の青春 公に負かず
今日鬢糸禪榻畔 今日鬢糸 禅榻の畔
茶煙輕颺落花風 茶煙軽く颺る 落花の風

31 江南春 江南の春 杜牧

千里鶯啼綠映紅 千里 鶯 啼いて緑 紅に映ず
水村山郭酒旗風 水村 山郭 酒旗の風
南朝四百八十寺 南朝 四百八十寺
多少樓臺煙雨中 多少の楼台 煙雨の中

【通釈】

起句 見わたすかぎり春景色の、あちらからもこちらからも鶯の啼き声が聞こえ、木々の緑が花のくれないと映じ合っている。

承句 水辺の村や山沿いの村々には酒屋の旗が春風にはためいている。

転句 一方、いにしえの南朝の都金陵には、四百八十と称する寺院がたち並び、

結句 そのたくさんの楼台が、茫々とけぶる春雨の中にかすんでいる。

【語釈】

江南…長江(揚子江)下流の南岸の地方。江蘇省南部、安徽省の一部及び浙江省北部にわたる一帯の地。気候温暖で豊かな地方である。杜 牧は青春時代をここ江南の揚州で過ごした。

鶯…日本の鶯より大きく黄色いコウライウグイス。

水村…水辺の村落。江南地方は川や湖水やクリークが多い。

山郭…山すその村。山村。郭は村里を囲んでいる屏。

酒旗…酒家の看板に立てる旗。酒旆。酒帘。青色の布を用いたので、青旗、青旆ともいう。

南朝…建康(今の南京。唐代は金陵といった)に都を置いた宋・齊・梁・陳の四王朝(四二〇―五八九)をいう。更にその前に、此の地に都した呉と東晉を加えて六朝とも呼ぶ。

四百八十寺…梁の武帝(五〇二―五四九)の時代、南朝の文化は頂点に達した。又仏教が栄え仏寺の造営につとめた為、首都建康の寺院の数は五百余にのぼったという。四百八十は実数ではない。
なお、十の字はこの場合のように多くの数字が連なる時は、仄三連を避ける為、シンと発音し平字(諶、侵韻)に読む。

多少…多くの。　　樓臺…寺院の高い塔や堂。
煙雨…けぶるように降る雨。

【押韻】
平声東韻。紅、風、中、

【解説】
杜 牧の詩は軽妙洒脱、特に七言絶句に傑作が多く、晩唐期第一の詩人とされる。又盛唐期を代表する杜甫を老杜と呼ぶのに対し小杜と呼ばれる。
この詩は、杜 牧がこよなく愛した江南地方の美しくのどかな春を詠じた名作です。特に第一句は、江南の風光明媚な春景色を七字に凝集した佳句として有名です。
詩の前半は晴天の農村風景を、後半は春雨にけぶる古都のたたずまいに、懐古の情をにじませて、併せて江南の春景色を美事に描き出しています。

32 新嫁娘

新嫁の娘　　王 建

三日入厨下　三日にして厨下に入り
洗手作羹湯　手を洗いて羹湯を作る
未諳姑食性　未だ 姑 の食性を諳んぜず
先遣小姑嘗　先ず小姑をして嘗めしむ

【通釈】
起句　嫁入りして三日目、いよいよ台所に入り新妻の仕事始め。
承句　手を洗い、気を引き締めてあつもの(スープ)作りに取りかかる。
転句　ただ心配なのは、お 姑 の味の好みがわからないこと、
結句　先ずそっと、小 姑(夫の妹)に味見をしてもらいましょう。

【語釈】
新嫁娘…お嫁入りしたばかりの新妻。娘は若い女。婦女。
厨下…台所。　　羹湯…あつもの。肉や野菜をまぜて作ったスープ。
諳…そらんず。暗記する。ここでは十分に知りつくす意。
食性…食物や味の好み。　　遣…使役の助動詞。……をして……せしむ。
嘗…なめる。味わう。

【押韻】

平声陽韻。 湯、嘗、

【解説】

嫁いで来たばかりの若妻が婚家の家風も十分にわからぬまま、不安を抱きつつもかいがいしく台所に立ち働き始めた様子を詠じたほほえましい作品です。「手を洗い」という、やや平凡な用語により、これからこの家の嫁としての初仕事を気持を引き締めてやるぞ、といういじらしい心情がかえって美事に表現されています。さぞや姑に気に入られ、よき嫁となることでしょう。このような光景は、日本でも戦前まで普通に見られたものです。

作者・王 建(七七八?―八三〇?)は中唐の詩人。潁川(河南省)の人。大暦十年(七七五)の進士。官は秘書丞・侍御史まで累進した。また数年間辺境の地に従軍した。

詩は特に、後宮の女性の心情や生活をうたう宮詞に巧であった。

33 烏衣巷

烏衣巷　　劉 禹錫

朱雀橋邊野草花　朱雀橋辺 野草の花

烏衣巷口夕陽斜　烏衣巷口 夕陽斜めなり

舊時王謝堂前燕　旧時王謝堂前の燕

飛入尋常百姓家　飛んで尋常百姓の家に入る

【通釈】

起句　朱雀橋のほとりには、野草が花を咲かせており、

承句　烏衣巷の入り口のあたりには、夕陽がさみしく斜めにさしている。

転句　昔このあたりに軒を連ねていた貴族の王氏や謝氏の豪奢な邸宅はあとかたも無く、その堂前に巣をかけていた燕が、

結句　今は、ただありふれた庶民の家の軒に飛びこんでいる。

【語釈】

烏衣巷…地名。今の南京市が建康と呼ばれた東晋時代、その南を画する秦淮河の南にあった街。当時王氏・謝氏など貴族の邸宅があった。その子弟が皆黒衣を着けていたのでこの名がついたという。

朱雀橋…秦淮河にかかっていた橋の名。橋の北は朱雀門に連なり、南は烏衣巷に連なる。

堂…大きな建物。住まい。住居。　　尋常…ありふれた。普通の。

百姓…庶民。

【押韻】

平声麻韻。 花、斜、家、

【解説】

劉　禹錫（七七二―八四二）は中山（河北省）の人。七九二年柳宗元とともに進士及第、更に上級試験にも合格し、順調に官途についたが政変により幾度も地方に左遷された。後、呼びもどされて太子賓客、検校礼部尚書となった。柳宗元とは無二の親友であり、白居易とも親交を結んだ。

この詩は、その昔（東晋時代）繁華を誇った古都建康（別名金陵・今の南京）の寂れた町はずれに立ち、世の栄枯盛衰を飛び交う燕に托して詠じた懐古詩の秀作です。

付十一　賞牡丹　　牡丹を賞す　　劉　禹錫

庭前芍藥妖無格　　庭前の芍薬　妖として格無し
池上芙蕖淨少情　　池上の芙蕖　浄くして情少なし
唯有牡丹眞國色　　唯だ牡丹のみ真の国色有り
花開時節動京城　　花開くの時節　京城を動がす＋

34 滁州西澗　　滁州の西澗　　韋　應物

獨憐幽草澗邊生　　独り憐れむ幽草　澗辺に生じ
上有黃鸝深樹鳴　　上に黄鸝の深樹に鳴く有るを
春潮帶雨晚來急　　春潮　雨を帯びて晩來急に
野渡無人舟自橫　　野渡　人無く舟　自ら横たわる

【通釈】

起句　私は独りで、草々のふかく生い茂る谷川のほとりに立ち

承句　頭上には樹木の深い茂みの中でうぐいすが鳴いているこの静かな風趣をしみじみと愛でている。

転句　川の流れは、春の雨で夕方になり急に水かさを増し、

結句　野原の中の渡し場には人影も無く、小舟が一艘寂しく横たわっている。

【語釈】

滁州…地名。今の安徽省滁縣。（南京の対岸の西北）

西澗…滁州の西を流れる谷川の意。　　澗邊…谷川のほとり。　　幽草…深く生い茂った草。

黄鸝…こうらいうぐいす。ちようせんうぐいす。日本の鶯に似てやや大形。

深樹…奥深く茂っている樹木。又、その樹木の中。

春潮…春のうしお。潮は海水の満ち引きの意。又上げしおをいう。揚子江では海の上げしおが、相当上流にまで遡上するといわれている。滁州の春の支流の水位にまで影響を及ぼしているのかも知れない。

晚來…夕方。　　野渡…野原を流れる川の渡し場。

【押韻】

平声庚韻。生、鳴、横、

【解説】

韋 應物(七三七?―?)は中唐の詩人。天性高潔で詩作に優れ、詩風は王維、孟浩然の流れをくみ、柳 宗元と併せて自然派詩人として有名。

この詩は作者が滁州刺史(長官)であった時の作。自然派詩人としての面目躍如たる作品で、わび・さびを歌う日本の和歌にも通底するような、味わい深い佳作です。

35 沈園二首其二　　沈園二首其の二　　陸 游

夢斷香消四十年　　夢は断たれ香は消えて四十年
沈園柳老不吹綿　　沈園 柳老いて綿を吹かず
此身行作稽山土　　此の身は行くゆく稽山の土に作らんも
猶弔遺蹤一泫然　　猶お遺蹤を弔いて一たび泫然たり

【通釈】

起句　夢のようなつかの間の再会の後、香りが消えてしまってから四十年、
承句　ここ沈園では、当時若々しかった柳も老いはてて、やなぎのわたを吹き出そうともしない。
転句　私もやがて遠からず、故郷会稽山の土になろうとしているのだが、
結句　それでもなお、あの再会のあとを訪れると涙があふれ落ちるのだ。

【語釈】

沈園…沈は人名。沈氏の邸にあった庭園で紹興にあった。
陸游は二十歳の頃母方の姪・唐琬と結婚し二人の仲は睦じかったが、嫁と姑の仲がうまくゆかず、母から離婚させられた。数年後二人はそれぞれ別人と再婚した。
陸 游三十一歳の時、たまたま沈園を訪れた時、同じく此の庭園を夫と共に訪れていた唐琬と再会したが、唐琬はその後間もなく他界した。陸 游は晩年に到るまで彼女のことが忘れられず、彼女の思いにまつわる詩を幾篇も残している。
夢斷香消…沈園での再会も一場の夢と去り、間もなく唐琬が他界したことをいう。
柳老…柳の木の老いに自らの老いを重ねる。
綿…やなぎのわた。柳絮。柳の実が熟して、それに付く白毛が晩春の頃綿のように乱れ飛ぶもの。
稽山…会稽山。陸 游の故郷紹興にある。
行…助字。やがて。将と同意に用いる。　作…なる。
猶…なお。やはり。まだ。　弔…哀悼の意をもって訪れること。
遺蹤…思い出のあと。　泫然…涙などのはらはらと落ちるさま。

【押韻】

平声先韻。 年、綿、然、

【解説】

陸 游(一一二五―一二〇九)は越州山陰(浙江省紹興)の人。字は務觀。號は放翁。范成大、楊萬里と共に南宋の三大詩人に挙げられる。

当時南宋は北方の金と対立しており、陸游は死ぬまで主戦論者で、後年憂国詩人と呼ばれる。官に就いての陸游の一生は主戦派と和睦派の政争による浮沈のくり返しであったが、晩年の二十年間はほとんど故郷紹興で自ら耕し貧困のうちに国を憂えつつ八十五歳の生涯を終えた。

この詩は陸 游七十五歳の作。若くして心ならずも離別した唐琬との四十数年前の偶然の再会があった沈園を訪れ、彼女への思いを詠じた二首の中の一首(沈園二首其二)で、しみじみと人の心を打ち作者の人柄をしのばせる清らかな佳作です。なお他の一首を左に示します。

付十二 沈園二首其一　　沈園二首其の一　　陸 游

城上斜陽畫角哀　　城 上の斜陽 画角哀し
沈園非復舊池臺　　沈園 復た旧池台に非ず
傷心橋下春波綠　　傷 心す 橋下 春波の緑
曾是驚鴻照影來　　曾て是れ驚鴻の影を照し来たる

36 小園四首其一　　小園四首其の一　　陸 游

小園煙草接隣家　　小園の煙草 隣家に接し
桑柘陰陰一徑斜　　桑柘陰陰として一徑斜なり
臥讀陶詩未終卷　　臥して陶詩を読んで未だ巻を終えざるに
又乘微雨去鋤瓜　　又微雨に乗じて去きて瓜を鋤く

【通釈】

起句　我が家の小さな畑の草原は、雨の中で靄につつまれて隣の屋敷までつづいており、

承句　桑畑には桑の木々がこんもりと茂り、その間を一本の小道がななめに走っている。

転句　(雨が降って来たので)ねころんで陶淵明の詩を読んでいたのだが、まだ一巻を読み終らぬうちに、

結句　また小降りになったので、出かけて行って瓜畑を鋤くことにしよう。

【語釈】

小園…小さな畑。　煙草…もやにつつまれた草。

桑柘…くわ。柘はやまぐわ。　陰陰…木が茂って暗いさま。

陶詩…陶淵明(三六五―四二七)の詩。陸 游は若年の頃から陶淵明に深く傾倒していたと伝えられる。

終巻…一巻を読み終える。　乘微雨…雨が小雨になったのを機会に。

鋤瓜…瓜畑を鋤く。瓜畑を耕し雑草を除く意。

【押韻】

平声麻韻。　家、斜、瓜、

【解説】

此の詩は陸游五十七歳の時、故郷山陰(浙江省紹興)での作。

この前年、陸游は官職にあり、任地の撫州(江西省)に居た時その地方に水害による飢饉があり、上司の命を待たずに官有米を農民に与えたとして罪を得、自身三度目の免職に逢い、故郷に帰り苦しい生活を余儀なくさせられていた。

詩は、何事もない平穏な晴耕雨読の生活を詠じたものとして鑑賞しても美事な作品ですが、右のような背景の下に再読すれば、作者の強靱高潔な精神と矜持に一層深く触れさせてくれる作品です。

37 田園樂七首其六

田園楽七首其の六　　王維

桃紅復含宿雨　桃は紅にして復た宿雨を含み

柳綠更帶春煙　柳は緑にして更に春煙を帯ぶ

花落家僮未掃　花落ちて家僮未だ掃わず

鶯啼山客猶眠　鶯啼いて山客猶お眠る

【通釈】

起句　桃の花は紅に咲き、昨夜からの雨をふくんでいっそうあでやかであり、

承句　柳の芽は緑にもえ、春のかすみを帯びてますますぼんやりと見える。

転句　落花が庭に散りしいているが、召し使いはまだ掃除もしていないし、

結句　庭先では鶯がしきりに鳴いているのに、山中の隠者先生(王維自身)はまだ眠っている。

【語釈】

宿雨…昨夜からの雨。　春煙…春がすみ。煙は霞。もや。　家僮…私家の召し使い。

山客…山中に棲む人。又山を訪ねる客。ここでは王維自身を指す。

【解説】

王　維(六九九―七六一)は盛唐を代表する詩人の一人。此の人の詩は已に此の稿で鑑賞している(3雑詩)のでその経歴は省略します。

この詩は「田園樂七首」と題した六言絶句の連作の一首で詩の制作時期について異説があり、また別人の作とする説もあるが、ここでは王維が四十三歳の頃より移り棲んだ藍田山中輞川の別荘での生活を詠じたものとして鑑賞する。

六言絶句という特異な詩型を採り、起・承句、転・結句それぞれ美しい対句の中に桃、柳、落花、家僮、鶯、山客という詩語をちりばめ、春ののどかな画のような情景を美事に詠じた作品です。